

テーマ賞

ほうき

松ぼっくり



おじいさんが掃除をしていると、いつものように針鼠が現れました。

「あなた、まだ帚なんて使って掃除してるの？ 他の星ではみんな掃除機を使ってるわよ」

しかし、針鼠がこう言うのはいつものことなのです。おじいさんは答えます。

「だって君、ここは三四番彗星じゃないか。彗の星なんだから、ほうきで掃かなくちゃ」

針鼠は大袈裟にため息をついて見せます。そうすると小さな丸いからだに息に合わせて動くのです。針、などというところんがついているような気がするけれど、案外丸っこくて可愛い生き物だ、おじいさんはそう思っています。口には出しません。

「なんだかね、番号の小さな星の奴ほど時代遅れなのよね。三千番台の星なんてみんな掃除機よ」

「若い奴はダメだなあ」とおじいさんは笑いました。

それから、掃き集めたほこりを古ぼけたちりとりに集めて、あちこち凹んだりしている金属製のゴミバケツに溜めていきます。

ゴミバケツが満杯になるとおじいさんはそれを持ち上げて彗

星の後ろの方へと歩いて行きました。そして、星空に向けて星が尾を伸ばしている場所まで来ると、その水色の明かりの中にエイヤとバケツの中身をばらまきました。

放たれた塵はひとたび星の尾と触れると、一瞬マグネシウムのような閃光を発して、それから七色の粒子になって宙に溶けていきます。針鼠はその様子を丸い目に映して、嬉しそうに小さな尻尾を振りました。

「やっぱり綺麗ね、この景色。これが掃除機なんて使ってる奴だと、紙パックをポイだから味気ないのよ」針鼠は言いました。おじいさんが掃除を終えたのを見届けると針鼠は「また来るわ」と一言、プイッと居なくなってしまう。

それを見届けたおじいさんが道具を仕舞うために物置を開けると、そこにはまだ一回も使われたことのない掃除機があるのです。

「楽をしようと思ったこともあるんだがなあ」とおじいさんは朗らかに言って、一つ大きな伸びをしました。